

第19回 古代イランとササン朝ペルシア

1 古代イランの王朝

- ・現在のイラン地域には、古くからインド=ヨーロッパ語系の民族が居住していた。
→前7世紀のアッシリア滅亡後、イラン系民族が（ ）を形成したとされる。
- ・前550年、（ ）が（ ）を建国してメディアから自立し、リディアと新バビロニアを滅ぼした。
※「イラン」と「ペルシア」はほぼ同じ意味で使用されるようになった。



キュロス2世
キュロス大王とも呼ばれ、『旧約聖書』ではメシアのひとりと考えられている。
出自は伝説も多い。

☆アケメネス朝ペルシア（前550～前330年）

都…（ ） ※現在のイラン西南部。

◆（ ）（在位 前550～前529年）

- ・アケメネス朝を建国し、第2代のカンビュセス2世の時代にはエジプトを征服して、オリエントを再統一した。

◆（ ）（在位 前521～前486年）

- ・この時代にアケメネス朝ペルシアは最盛期をむかえた。

◆（ ）（在位 前336～前330年）

- ・前330年、（ ）の東方遠征に敗れて滅亡した。

2 パルティアとササン朝ペルシア

- ・アレクサンドロス大王の死後、（ ）がイランを支配した。
→しかし前3世紀半ばにはイラン系の（ ）が独立した。

☆パルティア（アルサケス朝）（前248年ころ～後226年）

都…（ ） ※ティグリス川中流

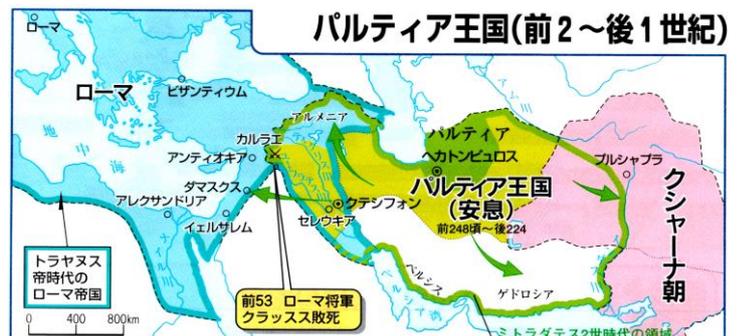
◆（ ）（在位 前247年ころ～前211年ころ）

- ・イラン系の遊牧民が、現在のイランを中心にして独立した。
- ・漢代の中国では、（ ）と呼ばれた。



アルサケス
安息とはアルサケスに漢字をあてたものである。

- ・パルティアの文化は、当初はギリシア・ヘレニズムの要素が強かったが、後半にはペルシア語が公用語となり、イランの要素が強くなった。
- ・後に西方のローマと争い、前53年にはクラッスを敗死させた。
- ・226年、同じくイラン系のササン朝ペルシアによって滅ぼされた。





アルダシール1世
ゾロアスター教の
神官であったという
説もある。ササンと
はアルダシールの
祖父の名前。

☆ () (226~651年)
都… () ※ティグリス川中流
◆ () (在位 226~241年)

・イラン系農耕民が、パルティアを滅ぼしイランのファールス地方に建国した。

◆ () (在位 241~272年)

・3世紀、東のクシャーナ朝、西のローマ帝国を攻撃し諸王の王を自称した。
→260年、軍人皇帝時代のローマ皇帝 () を捕虜にした。



ホスロー1世
ビザンツ帝国に
対しても、優勢に
戦いをすすめた。

◆ () (在位 531~579年)

・6世紀、中央アジアのトルコ系遊牧民 () と同盟し、同じく中央
アジアの遊牧民である () を滅ぼし、最盛期をもたらした。
・ビザンツ帝国の () とも激しく争った。

- ・7世紀、ビザンツ帝国と激しく戦ったが、ヘラクレイオス1世に敗れた。
- ・642年、新興のイスラーム勢力に () で敗れた。
→651年、ササン朝ペルシアは滅亡し、イランはイスラーム勢力の支配に入った。

<ササン朝ペルシアの文化>

- ・建国者のアルダシール1世の時代から () を国教とした。
→経典の () はササン朝の時代に成立した。
- ・3世紀、マニが諸宗教を融合させた () を創始した。
→シャープール1世の時代に保護されたが、その後は弾圧された。
→北アフリカ・ヨーロッパ・中国などに伝わり、他の宗教に大きな影響を与えた。



馬上のシャープール1世(右)が、ローマ皇帝
ウァレリアヌス帝(左)
を捕えるシーンがレリ
ーフとなっている。
ペルセポリスの近くな
ので同時に行こう。

シャープール1世の勝利を讃える碑



マニ

マニは、ユダヤ教、
ゾロアスター教、キ
リスト教、仏教を混
ぜたような新宗教
を創始した。
マニの処刑後も、
様々な宗教に影響
を与えた。



獅子狩文錦



漆胡瓶

ササン朝美術で
は、織物、銀器、
ガラス器が特に
すぐれていた。
法隆寺の獅子狩
文錦、正倉院の
漆胡瓶は、その
代表的な宝物。

- ・ササン朝ペルシアでは、美術・工芸の分野が大いに発展した(ササン朝美術)。
→中国や日本にも伝わり、現在でも () や () には、
ササン朝の影響を受けた美術品が数多く収蔵されている。

